

国立ゆかりの石彫家

せき びん

関 敏 作品

くにたちMAP

関 敏



時が咲いたるよさい

これは
ボートでは
なくて



楽しいところを探しに行こう

(公財)くにたち文化・スポーツ振興財団 発行

関 敏さんのこと

国立市内のあちこちに点在するたくさんの方の石の芸術。じつはたった一人の作家の手によるものだと知っていますか。関敏氏。谷保に生まれ谷保で育った石彫(せきちょう)家です。



自宅アトリエにて(2017年)

機械が嫌いでひたすら自分の手で、しかも道具の(のみ)を一本一本、手づくりするところから石を彫り、仕上げもなるべく手で磨く。その独自の制作工程が生み出した作品は、「石なのに、なぜかあたたかい」といわれる不思議な存在感に満ちています。ひとつひとつじっくり見ていくと、関敏作品のユニークさ、そして作品が生まれるまでのたくさんの時間と情熱が、きっとあなたにも伝わるはず。

マップ片手に市内をひとめぐり、いかがですか。

篆刻による
敏さんのサイン



●輪舞(ロンド)
オーストラリア砂岩 1993年

創立90周年記念で造られた、184枚から成る全長18mの壮大なレリーフ。木目のような柔らかさを感じさせる砂岩を、わざわざ現地まで買付に行ったのだそう。



●Heart Strings-87
大理石 1987年



●襞(ひだ)
黒御影石 1987年
インドを旅したときに見た石造物、その衣の美しさに触発された。地球のダイナミックな襞である山や谷、さらに西洋のピーナスと東洋の観音像のイメージもこめて。



ボートじゃなくて
蓮の花びら
なんです

●虚空
大理石 1977年
お釈迦様の足元を飾る蓮(ハス)は、煩惱の泥水の中から美しい悟りの花を咲かせる。本来は16枚だが、花びら一枚だけでも救われるのではと…。

●指月
赤御影石 2003年
月(仏)に向かって指差しているが、それは本当に指しているのか、その方向が正しいのか、たまに疑うことも大切だと…。



●ママ下湧水の碑
赤御影石 2003年
今でも湧水が湧き出る崖線下。敏さんが子どものころは、サウガニが棲みワサビ田もあった。

●永代供養塔
赤御影石・黒御影石 1998年



●弁才天像
インド黒御影石 1985年
学問と技芸のインドの神・弁才天は、インダス川を神格化したものとか。台座に水路を彫り「水の神」をも表した。
※境内では静かに鑑賞ください



●開校百周年庭園式岩石園
白御影石・大理石 1974年
国立市立第一小学校は敏さんの母校。いろいろな種類の石を並べた"学べるオブジェ"は後輩たちへの贈り物。
※関係者以外の鑑賞は許可が必要です



●地蔵尊像
白河石 1976年
谷保村の名士・本田家。その主屋や薬医門は国登録有形文化財になったが、庭の片隅に佇むお地蔵さんにもご注目。
※「文化財ウィーク」限定公開

●座牛
黒御影石 1973年
この像にこめられた、敏さんのゆかいな企みは裏面です。



●山口瞳先生文学碑
本小松石 1997年
直木賞作家・山口瞳氏の功績をたたえて。



●原田重久先生句碑
黒御影石 1981年
国立の郷土史家原田重久氏が詠んだ句「風落ちて青田の秩序 戻りけり」。



●和魂漢才碑
黒御影石 1978年
中国の進んだ学問を日本の精神を失わずにとりいれようとした平安時代。割れた先端は「それは本当にできるのか」という疑問を呈す。



ここで会えます 関 敏 作品



●時計塔
ホルトガル花崗岩 1979年
トップは花の形の球体ですが、市の予算不足で四角になったとか。



●レリーフ味(わ)
インド砂岩 2003年
せきやピルのエレベーターホールに入って見上げるとそこには...!白い鳩が天にむかって飛び立っていく姿は圧巻です。



●形が
山と口!

